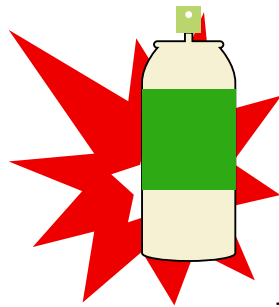


# 08

## 車の中に置いていたエアゾール製品が破裂

適量を均一に放出することができるスプレー式の容器は、殺虫剤、塗料、消臭剤などの家庭用品、ヘアスプレーや制汗剤などの人体用品、また自動車用品等に広く使われています。霧吹きのように人の力を用いるポンプタイプのももありますが、ガスの圧力を使って内容物を霧状や泡状に放出する製品は、特にエアゾール製品と呼ばれています。その多くはLPガス(LPG)やジメチルエーテル(DME)といった可燃性の高圧ガスを使用しているため、取り扱いによっては破裂や爆発の危険性があり、「車の中に置いていたタイヤ用パンク修理剤(エアゾール製品)が破裂して車内が汚れた」という相談が当センターに寄せられました。申し出者は「『高温のところには置かないよう表示してあるため、責任を負いかねる』とメーカーに言われたが、車の中は40℃以上になることもあり、自動車用品なのに『40度以上になるところに置かないこと』と表示されているのは車の中に置くことができず、そもそも表示に矛盾があるのではないか」と言っています。



エアゾール製品の容器の中には、それぞれの製品の目的となる成分のほかに、それを溶かしている溶剤や、噴射するための高圧ガスが入っています。ボタンを押すとバルブが開いて、容器内に詰め込まれている高圧ガスが目的成分・溶剤とともに容器の外に飛び出し、急激に膨張することによって細かい霧や泡をつくるという仕組みですが、高温の場所に置くと、高圧ガスが容器内で膨張して破裂する可能性があります。「高圧ガス保安法」では、エアゾール製品の容器として使用する缶の安全性について、70～80℃以下では破裂しない程度の耐圧性を確保するよう定めていますが、直射日光の当たる場所や暖房器具の近辺は70℃以上になることもあります。また炎天下の自動車内では、窓を閉めてエアコンを止めた場合、車室内の気温は60℃前後に、ダッシュボードの上など、場所や日当たりによっては70～90℃まで上がる恐れがあります。同法では、十分な安全性を考慮して、「温度が40度以上と

なるところに置かないこと」と表示することを義務づけています。また前述のパンク修理剤には「直射日光の当たる場所には置かないこと」との表示も併記<sup>へいき</sup>されていました。エアゾール製品を車の中に保管することは、できるだけ避けたほうが無難で、どうしても車内に置いておきたいという場合は、直射日光を避けるなど、置き場所に配慮して、十分注意して保管する責任が消費者に生じると考えられます。

エアゾール製品を安全に取り扱うためには、ほかにもいくつかの注意が必要で、湿気の多いところに保管すると缶にサビが生じて劣化<sup>れっか</sup>し、常温でも破裂する恐れがあります。さらに、高圧ガスや溶剤に可燃性のものが使われていることが多いため、火に近づけると引火して爆発する恐れがあります。小さな種火や火花、また火気を使用している室内で大量に使用することも危険です。そして廃棄<sup>はいき</sup>するときは、中身が残っているとゴミ収集処理の際に容器が破裂することがあるので、ボタンを押して中身が出ないことを確認してください。また自治体の指示によって缶に穴を開けるときは、火気のない風通しのよい屋外で行いましょう。どうしても使い切れないときの処理方法は、メーカーや自治体にお問い合わせください。

製品によっては、同じ用途でも、エアゾール製品のほかにポンプ式、ジェル状、ワックス状、固形など、さまざまなタイプがあり、それぞれに特徴を持っています。商品を購入する際は、保管場所や廃棄時のことも考慮した上で、それぞれにふさわしいタイプのものを選択するとよいでしょう。 (平成 14 年 10 月発行)

